

令和 2 年 6 月 11 日現在

機関番号：33302

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2015～2019

課題番号：15K01667

研究課題名(和文) 大学不適応・不登校傾向学生に対するレジリエンス評価の有効性

研究課題名(英文) Availability of resilience assessment for the university students with signs of maladaptation and non-attendance

研究代表者

佐藤 進 (SATO, Susumu)

金沢工業大学・基礎教育部・教授

研究者番号：90291757

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,700,000円

研究成果の概要(和文)：本研究では、大学不適応症状や不登校傾向を有する大学生に対するレジリエンス評価の有効性を縦断的および横断的資料に基づき検討することを目的とした。同一学生に大学不適応症状や不登校傾向、日常生活習慣、メンタルヘルス、レジリエンス、インターネット依存などに関する調査を年2回実施した。大学不適応症状を有する学生のストレス度、疲労度、うつ度、大学への充実感の乏しさ、ネガティブ対処行動、インターネット依存度は、レジリエンスが低い者ほど高く、レジリエンスが高い者ほど友人との会話頻度やポジティブ対処行動が高かった。レジリエンス特性と含めた学生の特性分類に基づく学生指導の有効性を示すかもしれない。

研究成果の学術的意義や社会的意義

「学生の健康白書」などの報告によれば、不適応症状を有する学生は増加し、休学率・退学率も増加傾向を示している。一方、大学の教育現場では、不適応症状を示す学生への効果的な対応策は見いだせていないのが現状である。このような中において、逆境からの立ち直りを意味する「レジリエンス」という概念を利用した検討が注目されている。本研究ではレジリエンスと不適応症状や不登校傾向、生活習慣、メンタルヘルスなどの関係について分析し、レジリエンス特性による傾向の違いが認められた。従来のストレス対処行動特性と同様に、レジリエンス特性も含めた学生の特性分類により、適切な学生指導に結びつける手段の一つとなるかもしれない。

研究成果の概要(英文)：This study aimed to examine the availability of resilience assessment for the university students with signs of maladaptation and non-attendance based on longitudinal and cross-sectional data. A biannual survey on the maladapted symptoms, sign of non-attendance, daily habits, mental health, resilience, internet addiction was conducted in spring and winter throughout this research period. In the students with these maladapted symptoms, their levels of stress, fatigue, depression, lack of the satisfaction of university, negative stress-coping behaviors, and internet addiction behaviors were higher in the low resilience group. In contrast, their communication frequency with friends and positive stress-coping behaviors were higher in the high resilience group. It may suggestion the availability of student advising based on the classification by considering the characteristics of resilience.

研究分野：健康科学

キーワード：ヘルスプロモーション メンタルヘルス レジリエンス 大学不適応

様式 C - 19、F - 19 - 1、Z - 19 (共通)

1. 研究開始当初の背景

わが国の20代～30代の若年層の自殺死亡率は上昇し、自殺既遂者にはうつ病等の気分障害が特に重要な自殺要因と言われる(厚生労働省, 2011)。若年層の精神的健康の問題は社会問題の一つである。また、「全入時代」における大学進学時の選択肢の増大は、各大学の新生の多様化のみならず、学生自身が抱える問題の多様化も誘発し、大学不適合学生の増加に影響している。実際、大学生の休学率・退学率は増加傾向にあり(学生健康白書, 2010)。その多くは、学業上の問題、対人関係、金銭面、将来の不安などに起因する心理的問題を抱え、統合失調症、うつ病、神経症、摂食障害、不眠などの愁訴を有する。大学の教育現場では、大学不適合症状を示す学生への効果的な対応策は見いだせていないのが現状と言える。

レジリエンスとは、トラウマ、悲劇的な脅威、ストレスの重大な原因の逆境に直面したときに、それにうまく適応するプロセスである。レジリエンスは性格などの特性ではなく、人々が保持している行動や思考、行為に含まれ、誰でもが学習することが可能であり、また発展させることができる(米国心理学会, 2008)。「非常にストレスフルな出来事を経験したり、困難な状況にまっても精神的健康や社会的適応行動を維持する、あるいは回復する心理的特性(石毛ら, 2002)」とされている。この概念がわが国で研究対象となってまだ歴史は浅く、精神的健康度に対する貢献度についても十分に検討されていない。

大学不適合の症状は意識・行動レベルでの不登校傾向を誘発し、結果的に休学・退学という学生・大学双方にとって最も望ましくない状況に陥る。それらは、学業や学生生活に関する問題や、将来・進路の問題、無力感・無気力感、人間関係上の問題、生活習慣の乱れなどに起因すると考えられる。精神的不健康は直接的に、または、前述の種々の問題を介して精神的不健康状態を誘発して作用する。そして、これらの問題への対処の段階では、問題を本人がどのように捉え(認識し)、どの程度耐えられるか、また、どのようなサポート環境下にあるかといった違いが、結果的にその後の不適合・不登校傾向に影響すると考えられる。この点について先行研究では、パーソナリティやストレス対処行動特性、ソーシャル・サポートの有無などに着目してきたが、これらの要因だけでは、現実に生じる問題の規定要因や因果関係など十分に説明できていないのが現状である。その解決策の一つとして、前述の“レジリエンス”という概念を含めた検討の可能性が注目されている。

2. 研究の目的

学生生活における問題は、精神的な不健康状態を誘発し、結果的に不登校傾向になる学生が増加している。このような学生の精神的健康度の問題に対するアプローチとして、本研究ではレジリエンスという概念に着目した。すなわち本研究では、このレジリエンスと学生生活の問題(不適合・不登校傾向)の関係について、横断的および縦断的資料にもとづく分析を通して、学生指導におけるレジリエンスの利用可能性について検討した。

3. 研究の方法

1) 調査方法

新生に対して入学当初と年度末に年2回同様な内容の調査を実施した。同様な調査を研究期間(5年間)実施し、横断的資料として用いた。さらに、調査時に同意が得られた対象について、学籍番号から2回の調査資料を紐付けし、縦断的資料として利用した。生涯スポーツ科目の授業時に調査票の配布および回収を行った。

2) 調査内容

調査票は基本属性、生活習慣、精神的健康度、疲労自覚症状、学生生活におけるメンタルヘルス、ストレス対処行動特性、大学不適合・不登校傾向、レジリエンスにより構成される。各要因の調査内容の概要は以下の通り。

基本属性：性別、年齢、居住形態、学部・学科など(縦断的跡調査の場合、同意を得たうえで学籍番号など追跡に必要な情報の記入を求めた。)

生活習慣：起床・就寝時間、朝食習慣、授業以外での運動習慣、気分転換活動の実施状況、家族・友人・教員とのコミュニケーション頻度、アルバイト実施状況、積極的に取り組む活動の有無、ネット依存度など

精神的健康度：総務省メンタルヘルスシートを利用し、ストレス度、うつ度、疲労度を評価した。

疲労自覚症状：小林ら(2000)の指標を利用し日常生活の自覚的な疲労症状を評価した。

学生生活におけるメンタルヘルス：松原ら(2006)の学生生活のメンタルヘルスに関する質問紙を一部改編し、5因子(学業へのつまづき感、大学への不本意感、不規則な日常生活、大学生活への充実感の乏しさ、自分への自信のなさ)30項目を用いて評価した。

ストレス対処行動特性：日本語版 WCCL コーピングスケールを利用して(問題解決、積極的認知対処、ソーシャル・サポート、自責、希望的観測、回避)47項目により構成され、問題解決、積極的認知対処、ソーシャル・サポートは積極的対処行動、自責、希望的観測、回避は消極的対処行動と位置づけられている。

大学不登校傾向：先行研究(牧野, 2001; 安藤, 1989; 植村ら, 2001; 小塩ら, 2000)などを参考に、意識レベルでの不登校傾向を評価した。さらに、行動レベルの不登校傾向とし

ては、出席不良指導歴の有無により評価した。

レジリエンス：小塩ら（2002）、Oshio et al. (2003)、齊藤ら（2011）を参考に6因子（新奇性追求、感情調整、肯定的な未来志向、ソーシャルサポート、親和性、重要な他者）31項目について評価した。

3) 倫理的配慮

各被験者には、研究参加の同意を得た。各個人のデータは全てコード化した後、データ入力および解析を実施した。追跡調査における個人照合のために得た情報は、データのマッチング以外には利用していない。本研究内容は、金沢工業大学 研究倫理委員会の承認を得たうえで実施した。

4. 研究成果

1) 大学不適応症状（大学に対する不本意感および学業へのつまずき感）を有する学生の特徴
2015年度新入生の資料を用いて分析した。1回目の調査では1,889名、2回目の調査では1,484名の有効回答を得た。その後、データの照合を行い、追跡可能であった1,411名を本研究の分析対象とした。

1年次春の時点で大学への不本意感は約1割、学業へのつまずき感は約2割の学生が有していた。これらの割合は冬の調査時点でも同等であったが、構成している学生の約半数は入れ替わっていた。大学への不本意感が春から冬にかけて生じた学生は、受験の失敗に対する思いが再燃し、自身の理想とする大学像とのギャップや授業内容・カリキュラムに対する不満が高まっていた。同様に、学業へのつまずき感が春から冬にかけて生じた学生は、課題遂行の困難さや学業への不向きさを自覚しながら、単位取得・留年・卒業への不安が高まる傾向にあった。入学時に学業へのつまずき感および大学への不本意感を有する学生の割合は1割から2割程度であるが、その特性は初年次の大学生活の中で変化してゆく。1年終了時に学業へのつまずき感を有している学生は、課題をこなすことや学業に向いているかなどに実際に問題を感じながら、単位・卒業・留年への不安を有している。また、入学後、新たに大学への不本意感を有するようになった学生は、実際の大学生活のイメージとのギャップや授業内容への不満などから、不本意入学の思いを再燃させている様子が窺えた。

新入生の学業へのつまずき感や大学に対する不本意感における初年次の変化と日常生活習慣との関係について、縦断的資料から検討した。学業へのつまずき感が生じた群では基本的な日常生活習慣や他人とのコミュニケーションが悪化する傾向を示した。同様な傾向は大学に対する不本意感では認められなかった。学業へのつまずき感が生じた群では基本的な日常生活習慣や他人とのコミュニケーションが悪化する傾向を示した。学業へのつまずき感という問題を抱える学生にとって、本質的な対処（勉強への積極的な取組）に加え、周囲の仲間との情報交換や関わり合いもその解決に重要な役割を果たしていると考えられる。同様な傾向は大学に対する不本意感では認められなかった。彼らの問題解決の糸口となる有効な手段について今後も検討していく必要があると考えられた。

学時に学業へのつまずき感や大学に対する不本意感を有する学生のメンタルヘルスおよびストレス対処行動特性について縦断的資料を用いて検討してみると、大学への不本意感または学業へのつまずき感が春から冬にかけて生じた学生のストレス度、疲労度、うつ度に関するメンタルヘルスは悪化した。また、各ストレス対処行動特性が変化した者（春から冬にかけて各対処行動を「獲得した者」と「喪失した者」）の割合について、学業へのつまずき感の変化に関する群別に比較した。つまずき感に変化のあった群の特徴をより分かりやすくするために、なし

なし群（年間を通じてつまずき感を有していない群）を基準に変化のあった2群（ありなし群およびなしあり群）の特徴を示した。ありなし群（つまずき感が冬になくなった群）について見ると、喪失では「ソーシャル・サポート」の高さおよび「問題解決」の低さ、獲得では「問題解決」「積極的認知対処」「ソーシャル・サポート」の高さが特徴であった。なしあり群（つまずき感が冬に現れた群）について見ると、喪失では「ソーシャル・サポート」および「希望的観測」の高さ、獲得では「ソーシャル・サポート」の低さおよび「希望的観測」の高さが特徴的であった。同様に、ストレス対処行動の変化について、大学への不本意感の変化に関するグループ別に示している。ありなし群（不本意感が冬にかけて無くなった群）について見ると、喪失では、「回避」および「自責」の高さが、獲得では「積極的認知対処」および「ソーシャル・サポート」の高さ、「問題解決」および「自責」の低さが特徴的であった。なしあり群について見ると、喪失では「自責」の低さが、獲得では「希望的観測」の高さと「問題解決」の低さが特徴的であった。つまり、不適応症状を有する学生は、積極的対処行動が減少し、消極的対処行動が増加する傾向にあった。学業へのつまずき感および大学への不本意感の有無はメンタルヘルスやストレス対処行動と密接な関係があることが窺えた。入学時とそれ以降では、これらの問題の原因や解決の糸口が異なっており、それらを理解したうえで適切な対応が求められよう。特に、実際の学生生活通を経て、学業へのつまずき感や大学への不本意感を初年次の後半から新たに有した学生のメンタルヘルスは良好ではなく、それらの学生に対するケアが重要である。

2) 大学不適応症状（大学に対する不本意感および学業へのつまずき感）と不登校傾向の関係
2015年度新入生の資料を用いて分析した。1回目の調査では1,889名、2回目の調査では1,484

名の有効回答を得た。その後、データの照合を行い、追跡可能であった1,411名を本研究の分析対象とした。

春および冬の調査時期における学業へのつまづき感および大学に対する不本意感の有無の判定結果をクロス集計し、度数および相対度数を算出した。不登校傾向の有無についても同様に、春と冬の縦断的資料をクロス集計し、度数および相対度数を算出した。

学業へのつまづき感および大学に対する不本意感と不登校傾向の関係を検討するために、学業へのつまづき感および大学に対する不本意感について、「はい(あてはまる)」「どちらとも言えない」「いいえ(あてはまらない)」の度数および割合を、不登校傾向がある群とない群それぞれについて算出し、特徴を比較した。さらに、不登校傾向のある群とない群における、学業へのつまづき感および大学に対する不本意感における「はい(あてはまる)」者の割合について、対応のない場合の2群の比率の差の検定により比較した。

不登校傾向と関連項目(勉強・人間関係の問題、学生生活の楽しさ)との関係についても同様に検討した。すなわち、各質問項目のカテゴリ度数および割合を、不登校傾向がある群とない群別に算出し、「はい」または「いいえ」と回答した割合について、対応のない場合の2群の比率の差の検定により比較した。なお、本研究の有意水準は5%に設定した。

春および冬における学業へのつまづき感および大学に対する不本意感の有無をクロス集計した結果、両調査とも学業へのつまづき感を有していなかった者は1,000名(71.3%)、「あり」から「なし」に変化した者は117名(8.4%)、「なし」から「あり」に変化した者は131名(9.3%)、両調査ともつまづき感を有していた者は154名(11.0%)であった。大学に対する不本意感については、両調査とも不本意感を有していない者は1186名(84.6%)、「あり」から「なし」に変化した者は69名(4.9%)、「なし」から「あり」に変化した者は77名(5.5%)、両調査とも不本意感を有していた者は70名(5.0%)であった。また、不登校傾向に関するクロス集計結果についてみると、春および冬に不登校傾向を有する者は、117名(8.5%)および170名(12.3%)であり、冬の方が53名(3.8%)増加していた。縦断的变化について見てみると、両調査時とも不登校傾向がなかった(「なし」「どちらとも言えない」)者は1134名(82.1%)、「なし」から「あり」に変化した者は130名(9.4%)、「あり」から「なし」に変化した者は77名(5.6%)、両調査時とも不登校傾向があった者は70名(5.1%)であった。いずれかの調査時点で初年次に不登校傾向を有した247名に限ってみると、年間を通じて不登校傾向を有する者は40名(16.2%)いるが、春から冬にかけて不登校傾向がなくなる者(77名,31.2%)よりも、冬にかけて不登校傾向を新たに有する者(130名,52.6%)の方が多かった。

不登校傾向の有無による学業へのつまづき感および大学に対する不本意感の特徴(「あり」「どちらとも言えない」「なし」)の違いについて検討した。春の調査時点において学業へのつまづき感が「ある」と回答した者の割合は、不登校傾向を有している群(40.6%)の方が、不登校傾向を有していない群(15.2%)よりも有意に高い値を示した。同様な傾向は冬においても認められた(不登校傾向あり:46.2%,なし:15.9%)。一方、大学に対する不本意感が「ある」と回答した者の割合に関しても、同様な傾向が認められ、いずれの調査時期においても、不登校傾向がある者の方が、大学に対する不本意感が「ある」と回答した割合が有意に高かった。また、不登校傾向を有している群における大学に対する不本意感を有する者の割合は、春から冬にかけて増加する傾向も窺えた。

不登校傾向の誘発に関連すると考えられる勉強や人間関係、学校生活の楽しさなどに対する回答について、不登校傾向の有無の両群間で比較した結果、「勉強は順調にしている」「先輩や先生とうまくいっている」「学校が楽しい」「学生生活(勉強以外)がおもしろい」に関しては「いいえ」の回答、「学業がうまくいかなくて落ち込むことがある」「学校の仲間から孤立している気がする」に関しては「はい」の回答の割合について、不登校傾向がある群とない群で比較した。分析の結果、春の調査時点では、すべての項目で有意差が認められ、不登校傾向を有する者ほど、勉強および学校の仲間や先輩・先生との人間関係に問題があり、学校が楽しくない傾向が認められた。冬の調査時点でもすべての項目において有意差が認められた。各項目における春と冬の回答の割合を見てみると、不登校傾向を有する群では、学業に問題を感じる者の割合や学校が楽しくないと感じる者の割合が10%ほど増加していた。また、学校の仲間との関係に問題を感じる割合も6%、先輩・先生との関係に問題を感じる学生の割合も8%ほど増加していた。

まとめとして、学業へのつまづき感や大学に対する不本意感といった大学不適応を誘発する要因と意識レベルでの不登校傾向には関係が認められ、不登校傾向を有している学生はこれらの要因に関して問題を抱える割合が高かった。さらに、不登校傾向を有する学生は、学業へのつまづきに加え、友人・先輩・先生との人間関係や、学生生活の楽しさの点でも問題を抱える者が多かった。初年次学生に対するこれらの要因に関する問題への対処が、不登校の予防という点でも重要であることが改めて確認された。

さらに、行動レベルの不登校(出席不良指導歴)と大学不適応症状やレジリエンス、メンタルヘルス等の特徴との関連について検討した。指導歴の有無を従属変数、関連要因変数(学生生活状況、大学不適応症状、レジリエンス、メンタルヘルス)を独立変数とする重回帰分析を実施した。初年次春の資料を用いた場合に有意な関連が認められた関連要因変数は、ネット依存、日常生活の規則性、学業へのつまづき感、ストレス度、問題解決対処であった。初年次冬の資料を用いた場合は、友人との会話頻度、積極的活動の有無、肯定的未来志向、学業へのつ

まずき感、自分への自信のなさ、ソーシャルサポートと有意な関連が認められた。入学時の学力支援や大学生活への適応支援、学内の人間関係構築支援などの重要性が示唆された。

3) 大学不適応症状を有する学生のメンタルヘルスとレジリエンスとの関係

2016～2017年度新入生の資料を分析に用いた。春の調査では3,123名、冬の調査では2,744名の有効回答を得た。その後、データの照合を行い、春と冬の2回の調査で追跡が可能であったサンプル2,542名を分析対象として解析を行った。

本研究では、受験の失敗や大学入学後の不適応症状を有する学生は、大学生活の中でストレスの影響を受けている(ストレス状況下にある)と仮定し、その状況下にある学生のレジリエンス特性とメンタルヘルス特性および関連要因との関係を検討することを試みた。

不本意入学(第一志望入学ではない)大学に対する不本意感、学業へのつまずき感の各大学不適応症状を有する学生をレジリエンス水準の異なる3群(レジリエンスL群、M群、H群)に分類し、メンタルヘルス特性やそれに関わる症状の得点を分散分析により比較した。具体的には、大学不適応症状を有する学生のストレス度、疲労度、うつ度、大学生活への充実感の乏しさ、自分への自信のなさ、ストレス対処行動特性(問題解決、積極的認知対処、ソーシャルサポート、自責、希望的観測、回避)、不規則な日常生活、家族・友人・教員との会話頻度、インターネット依存度について、レジリエンス水準の異なる3群間で比較した。比較には分散分析を用い、有意な主効果が認められた場合には、TukeyのHSD法に基づく多重比較検定を行った。

第一志望入学ではない学生のメンタルヘルスおよび関連要因の特性をレジリエンス群間で比較した結果、対象者のうち、第一志望入学ではないと回答した者は、1,325名(52.1%)であった。さらに、第一志望入学ではない学生におけるレジリエンス水準別人数は、L群224名、M群833名、H群268名であった。分散分析により、各メンタルヘルス特性の得点の群間差を検討した結果、家族との会話を除く全ての変数に有意な主効果が認められた。ストレス度、疲労度およびうつ度に関しては、L群、M群、H群の順に有意に得点が高かった(得点が高いほどストレス度、疲労度、うつ度は高いことを意味する)。大学生活への充実感の乏しさおよび自分への自信のなさは、L群、M群、H群の順に、また不規則な日常生活は、L群およびM群がH群よりもそれらの傾向が有意に高かった。ストレス対処行動に関しては、ポジティブ対処行動(問題解決、積極的認知対処、ソーシャルサポート)は、H群、M群、L群の順に有意に得点が高く、ネガティブ対処行動(自責、希望的観測、回避)では、逆の傾向が認められた。コミュニケーションに関しては、家族との会話に有意な主効果は認められなかったが、友人および教員との会話頻度は、H群、M群、L群の順に有意に高い値を示した。インターネット依存度は、L群、M群、H群の順に有意に高かった。

同様に大学への不本意感を有する学生について分析した結果、まず、春時点において大学への不本意感を有する学生は、201名(7.9%)であり、レジリエンス水準別人数は、L群39名、M群128名、H群34名であった。分散分析の結果、ストレス度、疲労度、うつ度ともに有意差が認められ、L群、M群、H群の順にこれらの症状が有意に強かった。大学生活への充実感の乏しさおよび自分への自信のなさにも有意差が認められ、レジリエンス水準が低い群ほどこれらの得点が高い傾向が高かった。不規則な日常生活には有意差は認められなかった。ストレス対処行動については、ポジティブ対処行動にのみ有意差が認められ、ポジティブ対処の傾向は、H群、M群、L群の順に有意に高かった。いずれのネガティブ対処行動にも有意差は認められなかった。コミュニケーションに関しては、友人との会話にのみ有意差が認められ、H群の方がL群よりも会話頻度が高かった。インターネット依存度はL群の方が、M群およびH群よりも有意にその傾向は高かった。

学業へのつまずき感を有する学生について分析した結果、ストレス度、疲労度、うつ度、大学生活への充実感の乏しさ、自分への自信のなさに関してはすべての変数に有意差が認められ、レジリエンス水準が低い群ほど良好ではない傾向を示した。ストレス対処行動は、ポジティブ対処行動にのみ有意差が認められ、レジリエンス水準が高い群の方が有意に高かったのに対し、ネガティブ対処行動には有意差は認められなかった。コミュニケーションについては、友人との会話にのみ有意差が認められ、H群およびM群のほうがL群よりも会話頻度が高かった。インターネット依存度はL群、M群、H群の順に有意にその傾向は高かった。

本研究の結果は、大学不適応という状況下にあっても、該当学生の精神的健康度が一様に低いわけではなく、その状況の受け入れ方や、不適応から受ける精神的な影響度が、レジリエンス特性によって異なることを意味している。このことは、大学不適応症状を有する初年次学生に対する修学指導やアプローチの仕方を考えるうえで、レジリエンス特性の把握の有用性を示唆している。第一志望校入学ではない者において、レジリエンスが高い者ほどポジティブ対処行動を積極的に取り入れ、ネガティブ対処行動は取り入れない、良好なストレス対処行動を行う傾向が強い。一方、入学後に大学への不本意感を有する者や学業へのつまずき感を有する者は、レジリエンス水準の違いにより、ポジティブ対処行動には差が見られたが、ネガティブ対処行動には差は認められなかった。高校生にとって、受験の失敗は非常に重大なネガティブな出来事であることは容易に想像され、第一志望校への受験の失敗後に他校へ入学した後であっても、現状の受け入れや精神の安定性の確保には、情緒的な対処行動やネガティブな対処行動による対応もせざるを得ない状況があるのかもしれない。そして、それらのネガティブ対処行動の現れ方にもレジリエンス特性が関係していると考えられる。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計11件（うち査読付論文 11件 / うち国際共著 0件 / うちオープンアクセス 3件）

1. 著者名 佐藤進, 鈴木貴士, 村田俊也, 畝本紗斗子, 佐々木瑛	4. 巻 28
2. 論文標題 大学不適応症状を有する初年次学生のメンタルヘルス特性とレジリエンスとの関係	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 工学教育研究	6. 最初と最後の頁 20-28
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 鈴木貴士, 佐藤進, 村田俊也, 畝本紗斗子, 佐々木瑛	4. 巻 28
2. 論文標題 工科大学生の積極的活動の経時的変化がメンタルヘルスに与える影響	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 工学教育研究	6. 最初と最後の頁 29-38
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 佐藤進, 鈴木貴士, 川尻達也, 村田俊也, 畝本紗斗子	4. 巻 27
2. 論文標題 新入生における学業へのつまずき感および大学に対する不本意感と不登校傾向との関係	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 工学教育研究	6. 最初と最後の頁 145-152
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 鈴木貴士, 佐藤進, 川尻達也, 村田俊也, 畝本紗斗子	4. 巻 27
2. 論文標題 工科大学生の積極的活動とメンタルヘルスの関係	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 工学教育研究	6. 最初と最後の頁 83-92
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 佐藤進, 鈴木貴士, 川尻達也, 村田俊也, 畝本紗斗子	4. 巻 26
2. 論文標題 新入生における学業へのつまずき感および大学に対する不本意感の変化と日常生活習慣との関係	5. 発行年 2017年
3. 雑誌名 工学教育研究	6. 最初と最後の頁 111-118
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 川尻達也, 佐藤進, 村田俊也, 鈴木貴士, 畝本紗斗子	4. 巻 26
2. 論文標題 工学系大学生のインターネット依存とメンタルヘルスの関係	5. 発行年 2017年
3. 雑誌名 工学教育研究	6. 最初と最後の頁 129-138
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 佐藤進, 鈴木貴士, 川尻達也, 山口真史, 村田俊也, 畝本紗斗子	4. 巻 25
2. 論文標題 入学時に大学への不本意感および学業へのつまずき感を有する学生のメンタルヘルスとストレス対処行動	5. 発行年 2016年
3. 雑誌名 KIT Progress-工学教育研究-	6. 最初と最後の頁 47-56
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 川尻達也, 佐藤進, 村田俊也, 鈴木貴士, 畝本紗斗子, 山口真史	4. 巻 25
2. 論文標題 大学生における運動とストレス対処の関連について	5. 発行年 2016年
3. 雑誌名 KIT Progress-工学教育研究-	6. 最初と最後の頁 31-38
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 佐藤進, 鈴木貴士, 川尻達也, 山口真史	4. 巻 24
2. 論文標題 入学時に大学に対する不本意感および学業へのつまづき感を有する学生の特徴	5. 発行年 2015年
3. 雑誌名 KIT Progress-工学教育研究-	6. 最初と最後の頁 53-62
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また, その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 鈴木貴士, 佐藤進, 川尻達也, 山口真史	4. 巻 24
2. 論文標題 大学生における生活習慣の経時的変化がメンタルヘルスに与える影響	5. 発行年 2015年
3. 雑誌名 KIT Progress-工学教育研究-	6. 最初と最後の頁 101-112
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また, その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 川尻達也, 佐藤進, 鈴木貴士, 山口真史	4. 巻 24
2. 論文標題 大学生における運動習慣の継続がメンタルヘルスに与える影響	5. 発行年 2015年
3. 雑誌名 KIT Progress-工学教育研究-	6. 最初と最後の頁 173-182
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また, その予定である)	国際共著 -

〔学会発表〕 計10件 (うち招待講演 0件 / うち国際学会 0件)

1. 発表者名 佐藤進
2. 発表標題 出席不良指導歴を有する学生の特徴と出席不良傾向誘発要因の検討
3. 学会等名 測定評価学会第19回大会
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 佐藤進
2. 発表標題 新入生における不登校傾向の変化と日常生活習慣および学生生活の特徴
3. 学会等名 日本体育学会第70回大会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 佐藤進
2. 発表標題 大学不適応症状を有する新入生のメンタルヘルス特性とレジリエンスとの関係
3. 学会等名 第67回日本教育医学会大会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 佐藤進
2. 発表標題 出席不良指導歴を有する学生の特徴と出席不良傾向誘発要因の検討
3. 学会等名 日本体育測定評価学会第19回大会
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 佐藤進
2. 発表標題 新入生の学業へのつまずき感および大学に対する不本意感と不登校傾向との関係
3. 学会等名 日本体育測定評価学会第18回大会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 佐藤進
2. 発表標題 入生における大学に対する不本意感および学業へのつまずき感の変化と日常生活習慣の関係
3. 学会等名 日本体育学会第69回大会
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 佐藤進, 鈴木貴士, 川尻達也
2. 発表標題 大学に対する不本意感を有する新入生のメンタルヘルスとストレス対処行動の特徴
3. 学会等名 日本体育学会第68回大会
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 佐藤進
2. 発表標題 大学に対する不本意感および学業へのつまずき感を有する初年次学生の特徴
3. 学会等名 日本体育測定評価学会第17回大会
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 佐藤進, 鈴木貴士, 川尻達也
2. 発表標題 友人とのコミュニケーションが少ない学生のメンタルヘルスの特徴
3. 学会等名 日本体育学会大67回大会
4. 発表年 2016年

1. 発表者名 川尻達也, 佐藤進, 鈴木貴士, 山口真史
2. 発表標題 大学生における運動習慣がメンタルヘルスに与える影響
3. 学会等名 平姓年度北陸体育学会
4. 発表年 2017年

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究分担者	鈴木 貴士 (SUZUKI Takashi) (60440484)	金沢工業大学・基礎教育部・講師 (33302)	
研究分担者	川尻 達也 (KAWASHIRI Tatsuya) (80626292)	金沢工業大学・基礎教育部・講師 (33302)	